



雲晴

「雲 晴」 第五号

平成二十五年一月一日発行

貞 林 院 瑞 正 寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五丁目四六―五
電話 (03) 3627-3411
FAX (03) 5699-1591

謹んで新春の

お慶びを申し上げます

電線に並んだ見慣れた雀も、お正月になると『初雀』になる。ふだんは嫌われ者の鳥も『初鳥』といって、神の使いとしてありがたがる。動くことのない山々も『初富士』になり、『初比叡』になる。歳時記の世界では、森羅万象ことごとくに「心」があつて、あたかも「新しい年になったことを知って張り切っている」かのようです。

数え年から、満年令時代へ。年が明けると一つ歳を重ねるといふ感慨はなくなりました。大家族から、核家族へ。大勢して屠蘇や雑煮を祝うことも少なくなりました。事情や環境が変わり、お正月の行事などは昔とは様変わ

りしたり、あるいは廃れてしまったものもありますが「新年を迎える気持ち」には昔も今もありません。キツと襟を正すというのでしょうか。この一年を充実したものにしたいと願うのです。

「一富士、二鷹、三茄子」といいますが、どんな初夢を見るかは、毎年ちよつぱり気になるところ。しかし、いつ見たものが初夢かと云うと、除夜の晩、元日の夜、二日の夜、そして古くは立春の朝と四通りあり、定説がありません。新しい一年どんな年にするか、いろいろと心に描いてみるのが一月。やはり肝心なのは、ひとりひとりの心がけのようです。

とはいえ、子供たちにとって、お正月はお祭り気分。賀状を選り分けて、お雑煮を食べ、そして、うれしいお年玉。遊びはカルタがランプに、羽子板がラケットに、双六がテレビゲームに、奴唄はカイトにと様変わり。

ちなみに、大正から昭和の初めにかけては、風気圧計などをつけて高層の気象観測をしていたといえますから時代は変わるものです。お正月を喜ぶ子供たちの心だけは、これからも変わってほしくありません。

私はハスの花が好きである。毎年八月に福島県のいわき市までお話をさせていただき伺いますが、常磐線の、特に下りの左側の席に座り外をみるのが楽しみである。というのも土浦のあた

たりは蓮根の名産地で

蓮の花

念仏院住職 中野隆英

ン」と音がすると教えられ、朝早

蓮田がここかしこにある。その蓮田に大輪の花がさいているのだ。朝日に生えて正に阿弥陀經の「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」である。

その花は自らの色で輝くのだということを教えてくれているのだということを知った。どろという煩悩を断ち切っている仏様は、それをあらわすためにハスの花

しかし収穫された蓮田を見ると無残の泥だらけのも荒れ果てた姿を見せている。それをみたときには、極楽浄土も一皮むけばどぶどろなのかと思ったがそうではなく、どんな泥を吸っても

の上にいらつしやいます。これを、仏の三徳の一つで「断徳」という。私たちもいただいた命を輝かせられるようにしたいものだ。

「二つで一つ」

かつて幻の童謡詩人といわれた「金子みすず」さんは、昼と夜のように、光と影のように、この世はすべて二つで一つだということをよく知っているひとでした。

「大漁」という詩を読むとそれがよくわかります。

朝焼け小焼けだ 大漁だ
大羽いわしの 大漁だ

浜は 祭りのようだけど
海の中では 何万の

いわしの とむらい するだろう
みすず記念館館長の矢崎節夫氏は、「二

十世紀のある時から、私を含む人々は、自分側、こちら側しか見たり、考えた

りしなくなりました。だからこそ 大漁 を読むと、自己中心、人間中心の

まなざしをひっくり返される感動に出会ったのしょう。本当に私たち人々は

大切なことを見ないで年を重ねてきてしまったのかもしれない。」と述べて

います。

浜の喜びと海の悲しみで一つです。生と死で一つです。

見えるものと見えないもので一つです。実際、いわしが弔いをしような

お泉の落語

落語の世界を訪ねて



お馴染みハツアン。正月を前にして、いいよ。」

もう借金で首どころかどこも回らない。「この一分だって嬉張り倒して家にある着物全部持ってきて質屋の番頭費か

こからともなく鶴が舞い降りてはしごに止まった。これは縁起がいい、鶴は千年というから鶴の千と止めてはしご

だから八四五とね「鶴の一八四五」これが当たるんだ。」

「なんだよ富くじのはなしかい。あんなの当たるはずないよ、やめたほうが

「札をお求めですか、何か番号にご希

望がお有りですか。」

「大有り名古屋のコンこんちきでい、鶴の一八四五をもらいたい。」

「ええと、鶴のつるつると、その札は売れてしまったようです、一番違いが

あります如何ですか。」

「なに、売れた、冗談じゃないその札は俺が買うんだ。」

「いえ札は早い者勝ちでお売りいたしますので、おあきらめを。」

「分かったよ諦めるよ、しかし悔しい

ねいい夢だったんだが。」

「ああ、なにかあったな人相に現われておる。」

鎌倉時代以前の諸宗派

一天台宗②

天台宗の名僧 最澄 (七六六～八二二)

日本における天台宗の開創者です。近江(滋賀県)の出身(幼名は「広野」)で、十二歳で近江の国分寺の行表に弟子入りし、十四歳で得度(出家)し、「最澄」という名前を授けられました。その後奈良の都に行き、十九歳で東大寺において具足戒(僧侶として守らなければならない行動規範のこと)を受けました。授戒後、故郷に戻り、比叡山に籠って一人修行を続けました。

八〇四年(延暦二三年)還学生として唐(中国)

に渡りました。唐では、台州および天台山で、中国天台第七祖道邃や行滿に天台教学を学び、極然から極、道邃から菩薩戒を受けました。さらに順曉から密教の伝法を受け、翌年、多くの經典や法具を携えて帰国しました。



八〇六年(延暦二五年)、新たな年分度者(毎年諸宗・諸大寺に一定の枠を設け、その中でおのおの得度を許可する制度の事、當時は僧侶の得度に対して国家の規制を受けていました)の割り当てで天台宗に二名の割り当てが認められました。これは天台宗が公認された事を意味し、現在の天台宗ではこの時を持って開宗としています。

天台宗の年分度者が認可されたあとも、正式な僧侶となるためには奈良で具足戒を受けなければなりません。最澄は比叡山に独自の戒壇の設立を目指しましたが、その最中の八二二年(弘仁一三年)六月四日に五六歳で亡くなりました。戒壇の設立は没後七日目に許可され、翌年新しい制度による授戒の制度が始まりました。主な著作としては、『山家学生式』『守護国界章』『法華秀句』『顯戒論』などがあります。

「ハイハイなんですか、夢判断か、鶴が飛んできてはしごに止まったから、鶴は千年というから、鶴の千と止めて、はしごだから八四五で『鶴の一八四五』が当たるでしょうって富くじですか。」

「富だよ、それがどうした。」

「いえあんなもの当たる訳がない、やめときなさい、だけどね今の夢判断はひとつ間違ひがある。はしごは高いところの上ったり降りたりするが上からなら飛び降りることができると、下から例えば二階には飛び上がれない。」と

いうことは、はしごとは上る方にこそ使うものだから鶴の千までいいが、はしごは下から『鶴の一五四八』と、おいおいなんだ走って、見料は。」

「そんなの払ったら富が買えないよ、まっぴらごめんねい。」

「またさっきの人が来たよ、あなたね何度来てもないものはないのですよ。」

「さっきのれなんかいらないよ。はしごは上りに必要か降りるに必要かてね、『鶴の一五四八』おくんねい。」

「ハイハイ、あれ今度は前後が無くてこの番だけあるよ。」

◆はつつあんの運命は……以下次号



どとは思わなかったかもしれません。しかし私たちは、それを自分の目に見ることができないから、あるいは自分の理屈に合わないからといってしまふのは、いささか私たちの慢心、思い上がりの心ではないでしょうか。

法然上人は、『一枚起請文』の中で「智者のふるまいをせずして、唯一向に念仏すべし」と仰せになりました。それは私たちに唯ひたすらに謙虚でありなさいと指示した言葉でござります。この「大漁」という詩は、見えるものしか見てこなかった私たちに大切なことを思い出さすかけを与えてくれ、さらに思い上がったこの心をおさめてくれるメッセージだと思います。(総本山知恩院布教師会ホームページより)

謹賀新年

貞林院瑞正寺住職 林 清方

副住職 林 良政

法類總代 林 英道

同寺総代世話人一同

寺内一同、おかげさまで元気に年を越すことができました。

今年も心を新たに精進いたしますので、今後とも寺の護持興隆にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成二十五年

「貞林院瑞正寺」年中行事

本年の行事につきましては、左記のとおり予定しております。近づきましたら改めてご案内いたしますので、お問い合わせの上ご参詣ください。

*春彼岸会法要 三月二十日(水)

施餓鬼会法要 五月十四日(火)

七月お盆法要 七月十四日(日)

八月お盆法要 八月十三日(火)

*秋彼岸会法要 九月二三日(月)

*春・秋彼岸会法要につきましては、改めてご案内をしておりますが、お中日に塔婆回向をしておりますので、ご希望の方は電話・ファックス、メール等によりお申し込みください。

平成二十四年貞林院瑞正寺団参

「岩手県遠野・

善明寺を訪ねて」

昨年の十月十四日・十五日に先代住職の郷里、遠野・善明寺をお参りしました。今年は檀信徒をはじめ法類であります検見川の善勝寺・日比野上人ご夫妻、書道関係からも数人と総勢二十五人のご参加をいただきました。善明寺は当山住職の兄が住職をしており、約八百年の歴史がある寺です。

到着後、本堂にて法要を行い、翌日が先代の命日に当たするため、東日本大震災物故者の霊とともに供養することができました。



善明寺本堂の前にて

法要後、善明寺住職より寺の歴史や堂内の説明があり、引き続き境内にある「錦洞文庫記念館」を見学しました。この記念館は書家でもあった先代が平成四年に古希を記念して建設されたものであり、自分の作品をはじめ生前に集めた書道関係のコレクションが数多く展示されております。

夕食は宿泊先のホテル会場にて両寺の懇親会も兼ね、遠野市長もお招きして、善明寺の住職夫妻と総代・役員さんとともに楽しいひと時を過ごすことができました。



後方は西方寺五重塔

翌日は宮城県(じょうま)の定義如来・西方寺をお参りました。この寺は同じ浄土宗ですが、折衝寺として有名で民間信仰

の対象として多くの方々がお参りに来られます。先ず本堂にて参加者一人ひとりの家内安全・身体健全をご祈願いただき、ご住職のご挨拶の後に抹茶のご接待など、丁寧なおもてなしをいただきました。

二日間の団参でしたが、天気にも恵まれ、これも阿弥陀さまのご加護と感謝しております。どうぞ今年も沢山のご参加をお待ちしております。

◇浄土宗一口メモ◇

「浄土宗の本山について③」

「金戒光明寺」

くろ谷さんとして親しまれている「金戒光明寺」は京都市左京区黒谷町にあります。法然上人がはじめて草庵を営まれた地であり、浄土宗最初の寺院でもあります。ここには法然上人が入滅(一二二二年)される二日前に書かれた、浄土宗の要であるお念仏の教えを簡潔に説かれた御遺訓「一枚起請文」が納められています。

この寺は徳川初期に知恩院とともに城郭構造に改められ、京都守護職会津藩の本陣となりました。境内には徳川三代將軍家光の母である江や家光の乳母として有名な春日局の供養塔などがあります。

(貞林院瑞正寺)